

愚^{おろ}か村の人たち フランス

昔むかし、ある夫婦に、ひとり娘がありました。夫婦は、娘をそろそろ結婚させたいと思っていました。

ある日曜日のこと、ひとりの若者が、娘に会いにやって来ました。夫婦は、大喜びで迎えました。

ご飯の時には、母親は、ワインを取りに地下室に下りて行きました。そして、た
るからワインを注ぎながら、ふと思いました。

（娘が結婚して出ていってしまったら、わたしたち、寂しくなるわねえ。どうしたらいいんだろう）

そして、すわりこんで、考えこみました。あんまり一生懸命考えていたので、ワイン
がこぼれて、どんどん流れ出しているのに気づきませんでした。

しばらくして、父親が、

「母さんは、ずいぶん長いこともどって来ないねえ。何をしているんだか、見てこなく
ては」といって、地下室へ下りて行きました。すると、妻が、座りこんでぼうっとして
いました。

「おまえ、どうしたんだ」

「いえね、あの子が結婚して出ていったら、わたしたち、どうしたらいいんだろうって
考えていたのよ」

「それは、そうだな。ふたりでいっしょに考えてみよう」

ふたりは、考えこみました。ワインは流れつづけました。

しばらくして、娘が、

「父さんも母さんもずいぶん長いこともどって来ないわねえ。何をしているんだか、見
てこなくては」といって、地下室へ下りて行きました。

「まあ、父さんも母さんも、どうしたの」

「いや。おまえが結婚して出ていったら、わしらはどうしたらいいんだろうって考えて
たのさ」

「そういえば、そうね。三人でいっしょに考えましょう」
しばらくすると、若者は、

（あの人たち、どうなってるんだろう）と思って、地下室へ下りて行きました。すると、栓を抜いたたるの前で、三人がうずくまってぼうっとしていました。

「ねえ。何をしてるんですか。ワインがすっかり流れてしまっていますよ」

若者がびっくりしてたずねると、父親がいました。

「いやね、娘が結婚して出て行ったら、わしらは、どうしたらいいんだろうって考えてたんですよ」

若者は、あきれて、

「じゃあ、好きだけ考えていてください。ぼくは帰ります。もし、あなたたち三人と同じくらいまぬけな三人に出会ったら、もどって来て娘さんと結婚することにしないう」といつて、出ていきました。

若者がしばらく歩いていくと、村の人たちが集まって、家の屋根をはがしているところに出くわしました。若者が、

「何をしているんですか」とたずねると、村の人たちはいいました。

「家の中が寒くてやりきれないんで、お日さまが入るように屋根をはがしているのさ」

若者は、あきれて、

「じゃあ、急いでどうぞ」といつて、歩いていきました。

しばらく行くと、村の人たちが集まって、かごで沼の水をかき回しているところに出くわしました。

「何をしているんですか」

「沼の水をくみ出そうとしてるんだけど、ぜんぜん水をすくえないんだ」

若者は、あきれて、

「じゃあ、急いでどうぞ」といつて、歩いていきました。

またしばらく行くと、男の人が、二またの熊手くまでで地面をひっかいているのに出くわしました。

「何をしているんですか」

「くるみを集めようとしてるんだけど、ぜんぜん集められないんだ」

「じゃあ、急いでどうぞ」

若者は、

「これ以上先へ行ってもむだだな。ここは、愚か村で、だれもかれもまぬけなのさ」と

いって、娘の家にもどって行きましたとさ。
おしまい

村上郁再話

資料『フランス民話集』新倉朗子編訳／岩波書店